

今日はあなたと恋日和

目次

今日はあなたと恋日和

5

河津さくら

273

今日はあなたと恋日和

黒い急須へ茶葉を落とし、沸かしたばかりのお湯を注ぐ。

ようやく遠のいた残暑の代わりに、熱いほうじ茶の似合う涼しい風がやって来た。そんな十月初旬の午後、茶葉を蒸らしている間に鼻歌交じりで湯呑を選んでいた私を、リビングにいる母が呼んだ。

「七緒、ちよつとこつち来て」

「なあに〜？」

ああ、芳しい香り。

母の分のお茶も淹れながら返事をする。手にした湯呑は思ったよりも熱い。あまり長い時間持つては入れなそう。そう思った私は急いでリビングに入り、ダイニングテーブルに置いた。

目の前に座っていた母が顔を上げてにんまりと笑う。これは……何かあるときの顔だ。

「どうしたの？」

「ね、七緒。お見合いしてみない？」

「えー」

思わずお気に入りの湯呑を倒しそうになってしまった。

「いいから、そこ座りなさい。お茶、ありがとね。いただきます」

「う、うん」

私がお見合い？ 確かにもうすぐ三十だし、彼氏もないし、彼氏どころかまだ……処女だし、お見合いでもしなければ今さら出会いなんてないだろうけど——って考えてたら落ち込んできた。

落ち着こうと、ふう、とほうじ茶を冷まし、ひと口啜った。ほつとする温かさが舌の上を滑ってゆく。

「お友達の知り合いの息子さんなんだけどね。お母さん、お友達に、いい人いないかしら、安永さん」って訊かれちゃってね。歳もちょうど良さそうだと思うって、七緒のこと話したのよ」

「ふうん」

「まあ無理には言わないけど……でもね、とつても素敵な人なのよ。ちよつと待って」

母は椅子の上に置いてあったバッグに手を入れて、ごそごそ何かを探し始めた。

——お見合いイコール結婚しろ、だよ。これって私に早く実家を出なさいっていう、無言の圧力かな。案だからって、いつまでも親元でぬくぬくしていたけど、そろそろ潮時なのかもね。

両親と弟夫婦たちの間で二世帯住宅の話も進んでる。さすがにそこに住まわせてもらおうなんて、図々しい考えは持っていなかったけれど。

ちよつどいい温度になった湯呑を両手で包むように握り、澄んだ餡色のお茶を見つめた。

「いいよ、別に。お見合いしても」

「え！ あらそう？」

「うん。もう、いい加減家を出なくちゃとは思ってたし、お見合いで結婚が決まれば、それもいいかもね」

「ななちゃん、なんのおはなし？」

遊びに来ていた姪の帆夏ほかが私の顔を覗き込む。父と鬼おにごっこでもしていたのか、額ひたいからこめかみを通った汗が、つるつるの頬に流れ落ちていた。

「うーんとね、大事なお話だよ」

「だいいはおはなし」

膝の上に乗った帆夏の汗を、ミニタオルで拭いてあげる。ついこの間までは小さい赤ちゃんだったのに、こんなに大きくなって……。私も歳を取るはずよね。

「あつたあつた。ほら、この写真見てみて！」

母が差し出したものから、慌てて顔を逸らした。心の準備が……！

「ちよ、ちよっと待って。まだ見たくないから、お母さん持ってたよ」

「どれどれ。お、なかなかいいじゃん！」

いつの間にかやって来ていた弟が、細身の母の背後から写真を奪った。大柄で筋肉質の体形と、濃い目の顔は父親そっくりなのに、性格は母親似でノリがいいんだよね。私は見た目が母親似で、性格は慎重派の父に近い。

「やっぱり隆明たかあきもそう思う？ 結構いいわよねえ」

「へえ、最近は写真屋で撮ったのじゃなくて普通の写真渡すもんなんだな。ほら、時恵ときえも見てみ」

「ほんとだ〜！ 眼鏡のイケメン男子ですよ、お義姉おねえさん！」

弟のお嫁さんであり、帆夏のママでもある時恵ちゃんが満面の笑みを私に向けた。ショートヘアの似合う、いつも元気で澁刺しぶさとした義妹だ。でも今日は、その明るい笑みを素直に受け取ることができなかつた。

「ありがとね、時恵ちゃん。でも見たくないの」

「どうしてですか？」

「う〜ん、変に期待したくないから、かな。当日までのお楽しみにします」

本当は、お見合いなんて興味がない。

「なるほど。そういう考えもありますね〜。でも本当に素敵な感じですよ」

理想を言えば好きな人と恋愛して、それを結婚つむに繋げたかったな、なんて。この歳で馬鹿げた妄想はいい加減やめたほうがいいのは、わかっているけど。

「この方ね、七緒の写真見て、ひと目で気に入ったらしいわよ」

「え、ちよっと、私に何も言わないで勝手に見せちゃったの？」

「家族旅行のときのね。だって、こっただけ見せてもらうわけにはいかないじゃない」

「もう……」

お母さんの行動にあきれつつも、自分の身を振り返った。

好きな人なんて何年もないし、彼氏がいたのも高校生るときだけ。

大学出てからずっと真面目にコツコツ働いて来たのに、その真面目さが仇<sup>あだ</sup>になって、会社ではお堅い人に見えるらしかった。可愛げがないって、陰で言われているのを聞いてしまったこともある。誘われることもなく、誘うこともなく、いつの間にか二十九歳。

夢なんか見たって現実にはほど遠い。最初から諦めていればがっかりすることもない。だから、必要以上に期待するのは、やめたかった。

「あ、お母さん。その人の情報も、お見合いまでいらさないからね。名前も、職業も、見た目も、何も教えないで」

笑顔で言う私を見て、母はやれやれと肩を竦<sup>すく</sup>めた。帆夏と遊んでいたおもちやを片付けた父が、母の隣に座る。

「ねえお父さん、いつごろ二世帯住宅建てるの？」

「ん？ ああ、そうだなあ。来年辺りがいいか？ 母さん」

「帆夏が幼稚園に入って、落ち着いてからがいいんじゃないの。隆明はどう？」

「それでいいと思うよ。しっかし、とうとう俺もローン持ちか。親子ローン、なあ」

「あら、嫌なの？」

「いえいえ、感謝しております」

おどけたような顔をして、弟が頭を下げた。

帆夏は来年の四月に幼稚園に入るから、園に慣れる期間を考慮しても、家を建てるまであと一年足らずということか。

お見合いで結婚を決めて家を出る。何となく口から出た言葉だけど、家族のためにも本当にこれが一番いいのかもしれない。こんな私を気に入ったなんて奇特な人があるのなら、恋愛がどうのと贅<sup>ぜいたく</sup>沢言<sup>げん</sup>っている場合じゃない。そこにロマンチックだの、ドラマチックだの、そんなものはいらないはずなんだから。

+ + +

それから三週間が経ち、お見合いの日は今度の日曜日に迫っていた。

「おはよ」

眠い目を擦<sup>こす</sup>りながらキッチンへ入ると、そこにいた母が目丸くして言った。

「おはよって七緒あんた、もう十時過ぎよ」

「有休なんだからいいでしょ」

コンビニで買っておいたレーズンパンをトースターに入れて温める。コーヒーを淹<sup>い</sup>れている間に、甘い匂いを漂<sup>ひら</sup>わせたパンを取り出し、お皿にのせた。

今日は木曜日。わざわざ平日のこの日に有休を消化するのにはわけがある。

「そうそう、七緒にこれ、来てたわよ」

ダイニングテーブルでパンにバターを塗る私に、母が差し出した。

「うっ……！！」

手渡されたハガキを見て、頬張ったパンを喉に詰まらせそうになった。幸せそうな笑顔で写る大学時代からの友人と、彼女の大きなお腹に手を当てて、これまた幸せそうにしている男性の写真。二人の周りにハートがいくつも飛び交っている。

「それ、さっちゃんでしょう。よくうちに遊びに来ていた」

「うん」

「結婚したのねえ」

「おめでた婚で入籍済み。結婚式は赤ちゃんも一緒に来年の予定です、か」

ハガキに書かれた文章を棒読みする。それにしてもいつの間に……。これでどうとうあの頃の仲のいい友人の中で、独身は私一人になってしまったというわけね。

「おめでたいわね。あんたも早くそうなるといいのに」

悪気のない言葉なんだろうけど、今の私には相当キツイ。ちぎったレーズンパンの上に、融けた黄色いバターが染み込んでいく。とてもおいしそうなのに、続きを食べる気持ちが萎えた。

「お母さん、私これからでかけるから」

「帰りは遅いの？ 夕飯は？」

「わかんないけど多分遅くなる。夕飯はいらないよ」

「もしかして着物着ていくの？」

「まあね」

「いい趣味よね。最近流行ってるんでしょ、着物女子。そういうところを日曜日にしっかり相手

の方にアピールしなさいよ」

ソファに座った母がリモコンで番組を替えながら笑った。小さくため息を吐いて、パンを残したお皿とコーヒーカップを片付ける。もつたいないことしてしまった、けど。

私だって友人の幸せは嬉しいよ？ でも……ハガキを目にしたと同時に大きな焦りと少しの苛立ちを覚えて、嬉しさが萎んでしまった自分が情けなかった。やっぱり好きな人と恋愛して結婚をするというのは羨ましい。

嫌な気持ちを振り払うように急いで自室へ戻り、クローゼットを開けた。着物を収納するために買った桐のチェストの浅い引き出しを、手前に引く。桐のいい匂いに、ささくれ立った心が慰められた。

半年前にカルチャースクールへ通って、三か月後には何とか着られるようになった和服。お気に入りの着物を着てどこかへかけてみたくて、鎌倉を訪れたのは六月下旬の梅雨の最中だった。なぜ鎌倉かという……着物で歩いても違和感のない街だと思ったから。家から割と近いし、お寺巡りが好きな私の、憧れの場所だからということもある。

一度目は、ほんの一時間ほど歩き回っただけで満足し、すぐに帰宅した。

二度目に着物で訪れたのは、その翌週の七月初め。梅雨明け間近の晴れた日で、思いがけない猛暑だった。ひどい暑さと着慣れない着物に気分が悪くなり、それに着崩れも起きて、その外出は大失敗。後悔した私は、夏の間は着物でおかけするのはやめた。そして涼しくなるのを待って、有休を取ったというわけだ。比較的空いていて過ごしやすかったという理由から、一度目、二度目と

同じ木曜日に。

「そういえばあのとき、手帖てしやうを失くしたんだっけ」

あまりの暑さに余程あまぼんやりしていたのか、どこに置いて来たのかもわからない革の手帖。個人情報こじんじょうは書いていなかったから変な心配はないけれど、お気に入りお気に入りを失くしてしまっただけは残念ざんねんだった。

そんなことを思い出しつつ、引き出しから、買ってからまだ一度も袖そでを通してない袖うでをそっと取り出す。その重みとしつとりした手触り、秋らしい綺麗な色に自然と頬が緩んでしまう。早く着たかったんだもの。嬉しくてたまらない。

気分が悪くなっても大丈夫のように、今日は簡単な着替えを持って行くことにした。くるりと丸めた肌触りのいいニットワンピース、ウールのショール、半分に折り畳める柔らかなパンプスとカラータイツ、一応予備の眼鏡も。これらを風呂敷ふろしきに包んで紙袋へ入れる。結構な荷物だけど、いいのいいの。備えあれば憂いなしなんだから。もしものときは着替えて、この袋へ着物を入れて持ち帰ればいい。

からし色の着物ぎもつに撫子色なでこの帯を合わせる。蝶ちょうの形のブローチを帯留めにした桃色の帯締め。長い前髪は編み込みにして、後ろ髪をねじってひとつにまとめ、撫子の形をした簪かんざしを挿した。眼鏡はやめてコンタクトに。メイクはしっかりとめに。目の詰まったあけびのかごバッグに、手拭いで作ったあずま袋を入れて、持ち物の中身が見えないようにした。

クローゼットの扉に付いている鏡の前に立つ。

「うん、いいんじゃない？」

眼鏡を外し着物ぎもつを着て、いつもと違うメイクと髪形にする。たったこれだけのことで、つまらない日常と冴えない自分が、くるりと一八〇度姿を変えて目の前に現れてくれるのが楽しかった。

リビングにいる母へ声をかける。

「行ってくるね」

「その着物の色いいわねえ。綺麗よ、七緒。雰囲気変わるわよね〜！ナンパとかされちゃうんじゃない？ お見合い控えてるんだから、ついて行っちゃ駄目よ」

「ないない」

大げさなんだから。廊下に戻る私に母もついてきた。

「ねえ七緒。日曜日のお見合いは振袖着て行ったらどう？」

「そ、そんな相手の人にドン引きされるに決まってるでしょ！ 私の歳考えてよ」

「振袖は未婚女性の正装せいさうなんだから別に何歳で着たって構わないのよ。一応二十代なんだし、まだまだイケるって」

「振袖が似合うような華やかな人なら何歳で着たっていいだろうけど、地味な私には無理」  
靴箱ぞうりばこから草履ぞうりを出して玄関げんかんに揃えた。

「誰かと一緒なの？」

「……うん、着物友達とね。いってきます」

「気を付けてね〜。いってらっしゃい」



誰かと一緒なんて嘘。でも一人だなんて言ったら、母にあれこれ詮索せんさくされそうで、それが何となく嫌だった。

とにかく、お見合いをして方が一にも上手く行ったら、着物を着て気ままにでかけるという贅沢ぜいたくな自由はなくなってしまうかもしれないだし、今のうちに楽しんでおかなくては。

外は十月の下旬らしい爽やかな秋晴れ。陽は暖かく、風もない。着物でお散歩するには絶好の日じつ和だ。

横浜駅から横須賀線に乗り、鎌倉駅で降りる。駅前は大さんの人で、ごった返していた。時計は午後一時を過ぎたところ。

バスターミナルを出発した金沢八景方面のバスは、鶴岡八幡宮の手前を右へ曲がり、突き当たり白い萩が咲き乱れる宝戒寺前を左折する。金沢街道を進むバスに揺られて十分ほど経った頃、到着した浄明寺バス停で降りた。初めて訪れる浄妙寺は、のんびりできるお茶室があるらしく、以前から楽しみにしていた場所だった。そういえば、どうしてバス停とお寺の名前の漢字が違うんだろう。あとで調べてみようかな。

大きな桜の木の葉が色づき始めていた。その先にある浄妙寺の山門をくぐって入山料を払う。すつきりと手入れされた境内に、本堂が現れた。高さのある縁側に年配の女性が二人仲よく座り、端では猫が気持ち良さそうに丸くなっている。

お賽銭を入れ手を合わせ、本堂左脇からお茶室「喜泉庵」へ向かった。

入り口で代金を支払い、履き物を脱ぐ。余計なものが一切ない、設えの美しい茶室へ足を踏み入れた。緋毛氈ひもせに正座をし、手にしていたかごと紙袋を横に置いて、障子の開け放たれた向こうに広がる枯山水の庭を見つめる。

庭に向かって座っている、ご夫婦。私のあとからお茶室を訪れた人の足音。趣のある静かな佇まいに自然と背筋が伸びる。やはり平日に訪れてよかった。

しばらくして私の前に干菓子運ばれてきた。口に入れた途端、舌の上でふわっとほじける。上品な甘さを楽しんでから、お抹茶のお茶碗を手にしたとき、ふと誰かの視線を感じて顔を上げた。

振り向くと、斜め後ろの少し離れた場所に一人の男性が座っている。こちらを見ていたその人と目が合った。私よりも年下に見える彼は、珍しいことに和服を着ていた。若い着物男子を、この辺りで見かけたのは初めて。

その人が私に向けて、ほんのわずかだけれど微笑んだ。途端に心臓が大きく音を立て、視線を外すことができなくなる。奥二重の少し大きな目、すつきりとした顔立ちに、ふんわりとしたショートショトの黒髪。……すごく好みのタイプかも。

「わあ、きれい」

入って来た若いカップルの声にはつとした私は、男性から顔を逸らして前を向き、手元のお茶碗に視線を戻した。きめ細かく泡立てられたお抹茶から湯気が立ち昇っている。口に付けたお茶碗を傾けると、舌に絡まったお抹茶の香りが鼻を抜けていった。

とてもおいしい。ひと呼吸おいてから、ふた口目を飲む。庭を見ていた夫婦が縁側を去る。自由

な雰囲気だし、特別なお作法を知らなくても大丈夫だから、緊張せずに落ち着けるはずなのに。なぜか私の意識は、まだ斜め後ろを向いたまま。

どうしてあの男性は和服を着ているんだろう。私と同じように一人で来ているんだろうか。近くに座ったカッパルは意外にも静かにお茶を楽しんでいる。葉のざわめく音が茶室を通り過ぎた。

飲み終わったお茶碗の端を拭き、立ち上がって誰もいない縁側へ移動する。正座をして、目の前の見事な枯山水にため息を吐いたとき、ぎし、と板を踏む音が響いた。そちらを向くと、さっきの和服の彼が縁側の左端で何かへ耳を寄せている。

確かあれは水琴窟だった、と思う。水滴の落ちる音が反響して美しい音色を奏でるのを聞くことができるのか。ガイドブックに書いてあったから、ここへ来たら私も聞いてみようと思っていたのに、すっかり忘れてた。

彼の姿に、再び胸が高鳴る。やや細身の体つきを表しているような羽織の肩の線が、何とも言いえない色気を感じさせた。どうしよう、目が離せない。

そちらを見つめてみると、また彼と目が合ってしまった。なぜかその人はこちらへ近付いてくる。別に何をしたわけではないけれど何となく気まずくて、顔を伏せて静かな足音を聞いた。

「お先に失礼しました。どうぞ」

「え？」

顔を上げると、すぐそばで私を見下ろす彼がいた。

「いい音でしたよ」

穏やかな声と、目尻を下げた優しい微笑みに囚われて、時が止まったようだった。何か言わなくちや……

「あ、……はい。すみません」

「いえ」

答えたその人は、喜泉庵を出て行った。

——なんて、素敵な人なの。

一度認めたら、止まらなくなつた。和服がとてもよく似合っていた。歩き方も堂々としていて、彼の衣擦れの音が耳に心地よかつた。何より……笑顔が印象的だった。

ひと目惚れの経験なんてない。慎重すぎて、好きな人すらなかなかできなかつたくらいなのに……。こんなふうにしたのは初めてだから、自分の気持ちに戸惑ってしまう。

結局、水琴窟を聞いてすぐに、私もお茶室をあとにした。あの人、もうお寺を出て行ってしまったのだろうか。彼を探して早足で進む。飛び石にまずまずになりながら、本堂の脇を通り過ぎようとしたとき——見つけた。

彼は本堂の縁側に座って、遠くを見ていた。全身に緊張が走る。鳥が鳴いたと同時にこちらに気付いた彼に軽く会釈をして、逃げるようにそこを去つた。

お一人ですかなんて、大胆なことを訊く勇氣があればよかつたのに。でも、迷惑かもしれないという思いが先に立って、とてもじゃないけど無理だった。和服を着て見た目だけは変身しても、結

局中身までは変わらないってこと。

はあ……何だか変に疲れてしまった。早くバスに乗って鎌倉駅まで戻ろう。

金沢街道を向こう側へ渡り、鎌倉方面のバス停に並ぶ。  
あの人、まだ本堂の縁側に座って遠くを見つめているのかな。そんなことを考えていたそのとき、通りの向こう側を、思い描いていた彼が歩いて来るのが見えた。途端に鼓動が速まる。

同じバスに乗るんだっただろうし……って、どうもしないか。バス停を通り過ぎて竹林の見事な報国寺に行くのかもしれない。だからといって、そこについて行ったら……ストーカーよねうん、わかっている。

本当はいろいろ考えているクセに、彼のことなど微塵も気にしていない素振りです、私はかごバッグからスマホを取り出し眺めた。バスが近づく音が聞こえる。並んでいる人について歩き、彼の姿を確認することなくバスに乗った。

後ろの空席に座って顔を上げると、予想に反して、彼も同じバスに乗り込んで来ていた。こちらを見るでもなく優先席の前に立ち、吊革につかまって窓の外へ顔を向けている。どうしよう……。だからどうもしないってば……！

あとから乗ってきた女性グループが、彼を見るなり目配せしたり、何度も彼を振り向いている。誰が見ても……素敵だよな。

たった十分ほどの時間が、とても長く思えた。

終点の鎌倉駅のバスターミナルに着いた。彼は、さり気なく、そばにいたお年寄りの大きな荷物を

持つてあげながら、バスから降りた。順番に私も降りる。このあと、どこに行くんだろう。立ち止まって信玄袋しげんふくろに手を入れ、何かを探している彼の横を通り過ぎた。もちろん声なんてかけてもらえないし、自分からかけることもできない。

緑色の車体が可愛らしい江ノ電に乗って、長谷駅はせに到着した。

この駅は、平日とは思えないほど混雑していた。お店が並ぶ長谷通り沿いを歩いて鎌倉大仏で有名な高德院こうたいてんへ行く。夏に訪れたときは深い土と緑の匂いが強かったこの近辺も、今は秋風の香りが漂うばかり。お土産屋みやげやさんの横を通り過ぎて、拝観受付に並ぶ人を見た私の心臓が再び大きく跳ねた。

「あ……」

さっきの、あの人！

後ずさりながら、そちらを見つめていると、彼が振り向いた。一瞬目が合ったけれど自分から逸らしてしまった。彼のあとを追って来たと、変な誤解をされたら困る、なんて思っ

それにしても……彼も鎌倉から江ノ電に乗って、そして長谷駅で降りたってこと？ 人が多かったから、全然気付かなかった。

ぎこちない動きで私も拝観受付へ進む。彼はもちろん私のことなど気にせずにそこを離れ、大仏様のほうへ行ってしまった。ホツとつつも、少しだけがっかりしている自分がいた。もしかして今度こそ喜泉庵のときみたいに声をかけてくれるかもしれない、なんて淡い期待をしていたらしい。

そんな自分が恥ずかしい。

ついさつき出逢ったばかりの、たったひと言交わしただけの人に一人で赤くなったり、そわそわしたり緊張したり、胸を撫で下ろしたりして、私つてば単純すぎる。でも、古都鎌倉で、お気に入り着物を着て、いつもと違う日常の中、あんな人と一緒にこの辺りを巡れたらきつと楽しいだらうな、なんて思ってしまったんだよね。

高德院の境内では、様々な葉が秋の色を纏い始めていた。大きくて立派な大仏様の前の賽銭箱へ小銭を投げ入れ、手を合わせた。大仏様の後ろには雲ひとつない抜けるような青空。余計な気持ちが洗われるようだ。左側から回り込んで進み、大わらじのある方へ向きを変えた、そのとき。

急ぎ足で目の前に現れた人に、ぶつかりそうになった。

「お、っと」

「あー」

よるめいた私の腕を取った、その人は――

「すみません、大丈夫ですか？」

「は、はい」

またもや……。わざとじゃないのに再び彼に近付いてしまった。彼の紺色の羽織の袖と私の着物の袖が触れ合っている。知らん顔するわけにもいかないし、何か言ったほうがいいんだよね。迷っている私に、彼が苦笑しながら言った。

「さつきから、よく会いますね。浄妙寺で一緒にしたの、覚えてますか？」

「ええ」

腕を離れたその人を間近で見上げる。私よりも十五センチくらい背が高い感じがした。顔も首筋も肩も、全体的にすつきりとした容姿で、近くで見るとますます……好み。

「お仕事か何かのご用事で鎌倉に？」

目が合った私に、彼が尋ねた。

「いえ、そういうわけではないんです。観光というか、この辺りが好きなので散策に」

「そうなんですか。僕も好きなんですよ、この辺」

秋の午後は控え目な光を優しく投げて、地面に頼りない影を作っていた。

「もしよかったら一緒に回りませんか」

「え」

「お一人ですよね？」

信じられない彼の問い掛けに、小さな声で「一人です」と返事をするのが精一杯だった。

私と、一緒に？ 湧き上がる嬉しさを抑えられない。

でも、懸命に、冷静になるのよと言いきかせる。

何考えてるの。さつき見かけたばかりの名目も知らない人に対して、こんな気持ちを持つなんて――

「僕もなんですよ。好きなところが似てそうだし、どうですか？ 和服を着た者同士で鎌倉巡り」  
でも、私。

「……はい……お願い、します」

戸惑う心と裏腹に、当たり前のように頷いてた。

大わらじのそばにあるベンチに、二人で座る。

彼は着物を着慣れているのか、動作にぎこちなさのようなものを全く感じさせなかった。そんなところにも、いちいちときめいてしまう。黒い足袋たびに雪駄せったという彼の足元を見た。身近に着物を着た男の人がいないせいか、隅々まで目を引かれていた。

「意外と着物姿の人は少ないんですね。もっと多いのかと思っていましたが」

私の視線に気付いたのか、大仏様を見ながら彼が先に口をひらいた。襟元から出ている首筋のどや喉のど仏が妙に色っぽくて、一人でどぎまぎしてしまう。

「私、七月の初めにも着物でここに来たんです」

「七月の初め、ですか」

こちらを向いた彼にすぐそばで見つめられて、頬が熱くなる。黒目が綺麗。

「ええ。そのときは着物の方と何人かすれ違いました。猛暑日だったんですけどね」

私は悲惨な目に遭ったけれど、着物を着慣れたふうの人は皆涼しげな顔で歩いていたのを覚えている。あんなふうになるまでの道のりは、遠そうだ。

「着物を着るなら猛暑日よりも、今の時期のほうが絶対がいいな。そう思いませんか？」

「ええ、本当に」

楽しみに笑いかけられて、そこでようやく私も笑顔で返事ができた。

外国人のツアー客や遠足の学生が次々に訪れて、辺りが途端に騒がしくなった。

「今日、僕は仕事が休みなんですけど、あなたも？」

「はい。といつても有休なんです。鎌倉は平日のほうが回りやすいかと思って」

「土日はすぐに帰りたくなるくらいなの、ひどい人出ひとでですからね」

顔を見合わせて小さく笑った。些細ささいなことなのに何だろう、胸の中がほわっと温かくなる。

「撮られていますよ、ほら」

「え？」

外国人観光客の数人が、遠くから私たちへデジカメを向けていた。

「着物が珍しいんでしょう。一人ならまだしも、男女二人揃っている、というのがまたターゲットになる理由かもしれませんね」

「あ、そうかも」

「何だか照れくさいな。ポーズ決めるわけにもいかないし」

困ったようにうつむく彼がおかしくて、思わずクスリと笑った。するとますます照れたようで、私から顔を逸らして向こうを向いてしまった。

初対面の人に可愛い、なんて思ったら失礼かな。

この人の纏まとう空気が、不思議なほど心地よかった。緊張はしていても、言葉は躊躇ためちうことなくすらすらと出てくる。普段、人見知りの私には考えられないことだった。彼の和服が目についたこと

は確かだけれど、それ以上にこの人自身の魅力に惹きつけられている。

観光客が去ると、安心したようにこちらを向いた彼が首を傾げて私に尋ねた。

「このあとは、どこへ行く予定でした？」

「特には決めていません」

「じゃあ、駅に戻りがてら長谷寺へ行きませんか」

「ええ」

彼と一緒にベンチから立ち上がり、高德院をあとにした。

三時過ぎに長谷寺へ到着した。大きく枝を伸ばした立派なもみじの木々。その葉が色づくのは、まだ少し先のような。ゆっくりと歩いて、美しい庭園を堪能する。荘厳な観音様をお参りして、私はてんとう虫のお守り、彼は手のひらにすっぽり収まる身代わり鈴を購入した。

長谷通りに戻って雑貨屋に寄ってもらおう。外国のアンティークが並ぶ中、私は帯留めに使えそうなものを探した。彼はこういった店に入るのに何の抵抗もないらしく、可愛い店内と一緒に雑貨を眺めてくれている。しばらくするとレジに向かい、何かを買ったようだった。私のほうは結局、いいものは見付からず、全然関係のないアクセサリーばかり見てしまった。

「すみません、付き合わせてしまって」

「僕は楽しかったですよ。普段こういうものには縁がないので」

お店を出たところで優しく笑った彼は、信玄袋に購入したものをしまった。

駅に向かって歩きだし、人通りの多い場所を抜けていく。改札の手前で立ち止まった彼が、私に

言った。

「歩き慣れていらっしやいますよね」

「そんなことはないんですけど、今日は調子がいいみたい」

「それはよかった。僕も一人でいるよりは足取りが軽いかな。ところで、あの」

「？」

「お時間大丈夫でしたら、もう少しだけ付き合っただけませんか」

「ええ、もちろん」

私もまだ帰りたくはなかったから、誘ってくれて嬉しかった。

再び江ノ電に乗る。極楽寺駅を過ぎて稲村ヶ崎駅へ着く手前、窓の向こうに海と空が広がった。私たちは山のほうを向いて並んで座っていたから、後ろにある窓を振り向いて二人で青い海を眺めた。傾き始めた日の光が、きらきらと海に反射している。何人ものサーファーが波に乗り、遠くに揺れるヨットが見えた。

七里ヶ浜駅と鎌倉高校前駅から学生がどつと乗り込んで来たため、座席を詰め、彼との距離が近くなる。満員電車と同じと思っても顔が火照ってしまい、ごまかすためにうつむきしかなかった。緊張しているうちに江ノ島駅に到着した。地下道から地上へ出ると、江の島大橋が現れた。橋の先には江の島がある。青い海から吹く風が、着物の袂を大きくはためかせた。空の高い所だとんびが鳴いている。潮の香りを深く吸い込み、解放感を味わった。

長い橋をゆるゆると渡る。それから青銅の鳥居をくぐって、坂の参道を上った。  
「疲れませんか？」

「ゆっくり歩いてくださっているから大丈夫です」

彼は度々私を振り向いて、歩幅を合わせてくれる。

参道を上りきると、だいぶ日が落ちていた。さらに上へ行くにはもう時間が遅いということで、ここから海を眺めることにする。

人の多い場所から少し離れて遠くを臨むと、日暮れの中にぼつぼつと外灯が点き、湾岸に夜景が見えた。

「綺麗……」

私にはもったいないくらい素敵な日だった。夢なら覚めて欲しくないなんて思ってしまったくらいなの。  
「今日は、ありがとうございます」

「今日は、ありがとうございます」

お辞儀をした私に、彼も頭を下げた。

「僕のほうこそ、ありがとうございます。楽しかったです」

「私も楽しかったです、とても」

微笑んだ彼が信玄袋に手を入れた。いつの間にかやって来た猫が、そばのベンチに座ってこちらを見ている。目が合うと、ごろんと寝転がってお腹を見せた。その仕草が可愛くて思わず笑みが零れる。

「よかったら、これ」

彼の声に視線を戻す。差し出された手のひらには紙袋がのっていた。

「何ですか？」

「開けてみてください」

手に取って袋の中を覗くと、透明なケースに入った繊細なシルバーのチェーンが見えた。小さな乳白色の陶器でできた、バラのペンダントトップのネックレスだった。

「これ、さっきのお店の!？」

「何度も見えていたようだったので。今日のお礼に受け取って下さい」

あまりの可愛さに、帯留め探しもそちのけで見えていたアンティークネックレスのうちのひとつだ。結構なお値段だから買うことはやめたんだけど、彼がそれに気付いていたなんて。

「ただけません、こんな」

「いいんです」

「でも」

「後悔しますよ」

彼が表情を曇らせた。

「え？」

「あとからその場所に行っても、二度と巡り会えないかもしれないじゃないですか」

真剣な眼差しと低い声に、心臓がどくと跳ねた。急に雰囲気が変わった気がして戸惑う。

「手に入れておけばよかった、なんて思うより、買ってから後悔したほうがまだいいでしょ？」  
クスツと笑った彼は私の手からケースを奪い、ネックレスを取り出した。留め具を外して私の首元にそれを着けてくれる。

「似合ってます。着物に合わせても、おかしくない」

「ありがとうございます。申し訳ないですけど、お言葉に甘えて……いただきます」

首に触れるチェーンから彼の心遣いが伝わるようで何だかくすぐつたい。階段を下りてくる人たちが私たちの横を通り過ぎていった。

「あの、私にもお礼をさせて下さい」

「何もいらぬですよ」

「せめてお茶くらいは、ごちそうさせて欲しいんですが……」

「それじゃあ」

かがんで近づいた彼が悪戯いたずらっぽく、にっと笑った。少し子どもっぽいなその表情にどきりとする。

「今から夕飯に付き合ってもらえませんか？ 僕、お腹空すいちゃって。もう六時過ぎですよね」

「それはもちろんお付き合いしたいんですけど、あの」

お茶を奢おごるくらいなら余裕で持っているんだけど、食事となると心配が先に立つ。お酒も飲むよね？ もしも足りなければカードを使えばいいかな。お財布の中身を頭の中で計算していると、焦る私を安心させるかのように彼が言った。

「僕がお誘いざないしてるんだから、会計の心配は要らないですよ」

「でもそれじゃ、なおさら困ります」

「どうか、実はもう予約入れちゃってるんですよ。謝らなければいけないのは僕のほうで」

「予約？」

「あなたが席を外している間に……すみません」

さつき、お手洗いに行ったときだろうか。

「僕が勝手なことを言ってるんですから、どうぞ気兼ねなく。あ、でも無理なら断ことわって下さいね」  
「無理じゃない、です」

本当は、私ももっと一緒にいたかったから。

「和食は大丈夫ですか？」

「ええ、好きです」

「じゃあ行きましょう。冷え込まないうちに」

薄暗い石段を下りて、参道に戻った。両脇に並ぶお店は行きと同様の賑にぎわいで、縁日えんいちの夜店のような雰囲気ふんいきを醸かみ出し出している。外灯の下、空車を表示したタクシーが数台並んでいた。彼のあとについてタクシーの後部座席へ乗り込む。

「どちらまで？」

「プリンシパルまで、お願いします」

え……？ それってもしかして、ホテルの？

驚いた私はひとつ息を吸い込み、彼に聞こえないよう静かにそれを吐き出した。タクシーが発車



する。フロントガラスに迫る江の島大橋を見つめながら平静を装い、混乱する頭の中で考えをまとめた。

あそこはきちんとしたホテルでレストランが絶対にあるはずだから、何もおかしいことはない。私を考え過ぎなの。せつかく誘ってくれたものを必要以上に構えては駄目。お互い大人なんだし、これくらいのことでは動揺はしない。大丈夫。

タクシーは海沿いの国道を走っていく。右側に座る彼の向こうに湘南の海が見えた。日が落ちたあとの水平線に近い空はオレンジ色をわずかに残し、降り注ぐ群青に呑み込まれそうになっている。贈られたネックレスのペンダントトップをそっと指先で触り、彼の言葉を思い出した。

——あとからその場所に行っても、二度と巡り会えないかもしれないじゃないですか。心臓の音と共に鳴るかのようには、星がひとつ、ふたつと宵闇の空に瞬き始めていた。

やがて目の前に、明かりに照らし出された美しいホテルが現れた。途端に高まる緊張が、手のひらを濡らせる。食事に来たのよ、食事に。それだけなんだから落ち着いて。

「あ、ここでいいです」

ホテルの手前で彼が運転手さんに告げた。

「ここでよろしいですか？」

「ええ。ありがとう」

素早く支払いを済ませた彼とともに降りたすぐ前には、古民家のような佇まいの建物。ホテルの

敷地内のようなだから、もしかしてこれが……お店？

「ここ、鉄板焼きがおいしいんですよ」

「あ、そうなんですか。初めて来ました」

ホッと胸を撫で下ろす。と同時に、彼に対して申し訳ない気持ちが入み上がった。約束通り食事に連れて来てくれただけなのに。これだから男慣れしてない女は駄目なのよ。

「あ、ちよつとここで待っていて下さい。先に確認しておきたいことがあるので」

「え？ ええ」

「すぐに戻りますね」

早足で進んだ彼が一人でお店に入る。手持無沙汰になって振り返り、ホテルの外観をぼんやり見つけた。正面入り口は、ここよりもっと奥にあるらしい。

ドアの開く音と同時に、彼がこちらへやって来た。

「すみません、お待たせしました。行きましょう」

「はい」

店内に入ると、店員さんが私たちへお辞儀をした。

「いらっしゃいませ。こちらへどうぞ」

太い梁が何本も走る、吹き抜けの天井。カウンター席の前にはお酒の瓶が並び、大きな鉄板があった。私と彼は窓際のテーブル席へ案内された。窓ガラスの外のと遠く、闇の中に小さないくつもの光を纏う江の島が見える。

「どうせなら窓際がいいかな、と思ったんですが、暗くてあまり見えませんね」  
苦笑した彼とともに椅子いすに座った。

「それで、さつき確認されてたんですね。窓際の席かどうか」  
「あ、ええ、まあ……そんな感じですよ」

お店の前で私を待たせたのは、それが理由じゃなかったの？ 一瞬戸惑いの表情を見せた彼の言動が引っかかった。

「お酒は飲めますか？」

「少しなら」

「僕も少しだけ飲もうかな」

種類がたくさんあるので迷いながら、お酒を選ぶ。

「桃酒を」

「僕は湘南ビールで」

「かしこまりました」

店員さんが去るのを見届けてから、彼が肩すくを竦めた。

「喉のど渴いちゃって」

「たくさん歩きましたもんね」

「ですね」

彼のはにかんだような笑顔に合わせて、私も笑った。笑い方が無邪気な感じに思える。やっぱり

この人、年下なのかな。

乾杯をしてから、一品料理を選んだ。料理を待つ間に、あずま袋の中で泳いでいた、拝観料と引き替えに渡されるチケットと手帖てちょうを取り出した。手帖をひらいて、チケットをカバーに挟む。

「それ、いつも手帖に入れているんですか？」

「ええ。どこかに行ったときは必ずこうして記念に挟んでおくんです」

「そうですね……」

江の島でネットワークスを差し出したときのように、彼の表情が再び曇った気がした。でもそれはほんの一瞬のことです、すぐに元の優しい表情に戻ったから、私は安心してそのあと話を続けた。

お酒を飲みながら口にした生しらすは、ねっとりとしていて味が濃厚だった。湘南でとれたという魚のお造りは甘く、大根の煮物はほろほろと口の中で崩れてしまう。

「僕は都内に住んでいるんですが、あなたのお住まいはここから近いんですか？」

「横浜です。都内からだと、ここまで結構お時間かかりませんか？」

「たまに仕事関係で鎌倉には来ているんですよ。今日は完全にオフなので普段は見られない場所に行こうかと、うろうろしていました」

あなたがいてくれてよかった、と彼が呟いた。そんな嬉しいことを言われても、どういう顔をしないでいいかわからない。

「お待たせいたしました」

地野菜の鉄板焼きが湯気を立てている。続けて運ばれた帆立貝ほたてがひと車海老は、新鮮で味が濃厚。そ

して黒毛和牛は塩とわさびで食べるのがおいしかった。でも胸がいつばいで、たくさんは口にする  
ことができない。

彼が私の隣の椅子いすを見た。

「荷物多いですよ。重くなかったですか」

「え、ええ全然。……お土産なんです」

まさか着替えの洋服が入ってるなんて想像もできないよね。折り畳みのパンプスまでであると知ら  
れたら、あきられちゃうかも。

「言いそびれていましたが……その着物、あなたにととてもよく似合っていますよ」

突然放たれた彼の言葉に、胸が熱くなる。優しい視線から逃げるように、からし色の着物の袖そでに  
目をやった。

「あ、ありがとうございます。これアンティークの着物なんです。綺麗な色で秋らしいかと思って  
買いました。でも初心者なので、こういう合わせ方でいいのかよくわからないんです。あの、男性  
の着物姿も、とても素敵ですよ」

「僕も初心者なんです。どうしたらいいのか、まるでわからないので、呉服屋で選んでもらった  
のをそのまま着てます」

「ご自分で着られるんですか？」

「一応。趣味で始めたばかりだから、着慣れてる人から見ればおかしなところがたくさんあると思  
います」

「私も、そう思われているかも」

お互い初心者だということに、またひとつ緊張が解けた。私の様子に気付いた彼が覗き込むよう  
な上目づかいで言った。

「安心しました？」

「……安心しました」

「僕も」

二人で顔を見合わせてクスクスと笑う。今日何回目だろう、こんなふうにして笑い合うのは。小  
さな秘密を共有したときのわくわくするような思い。男の人と胸をときめかせながら話すという、  
この感じが……知ってしまったら抜け出せないくらいに心地よかった。

「今度は、お互い着物じゃないときに源氏山げんじやまのほうへでも行きませんか」

「銭洗弁天ぜにあらべんてんや佐助稲荷さすけいなりがあるほうですよ」

「あの坂は靴で行かないと、僕にはまだまだ無理かな」

「私も草履ぞうりでは無理です。靴でも少し大変ですもんね」

今度、なんて素敵な約束に答えてしまっているのだろうか。すっかり忘れそうになっていた三日  
後に予定しているお見合いのことが、頭を掠めた。でも……今は何も考えたくない。

鎌倉周辺のお店や、これから行ってみたいお寺、着物のあれこれなどを話して、時間は瞬またたく間に  
過ぎて行った。

「お時間、まだ大丈夫ですか？」

「ええ。明日も有休を取つてあるので」  
「そうですか……」

微笑んだ彼は窓の外へ視線を移した。私も同じように窓の外へ目を向ける。暗闇を見ていたはずなのに、いつの間にかガラス越しに彼と見つめ合っていた。恥ずかしいのに、なかなか視線を外すことができない。

ふいに、彼が立ち上がった。

「ちよつと失礼。すぐに戻ります」

「あ、はい」

お手洗い、かな。

「好きなもの、頼んでいいですからね」

「ありがとうございます」

彼の笑顔に私も笑顔で返す。

窓の外では、江の島の灯台が規則的にこちらへ光を投げていた。さつき島の上から見下ろしていた遠くの場所に今、私がいる。それが、とても不思議なことに思えた。

しばらくして彼がテーブルに戻つて来た。

「お待たせして、すみません」

「いえ」

席に着いた彼は、私を見ずに再び窓の外へ視線をやった。表情から笑みが消えて、黙り込んだままだ。  
「……あの？」

ついでさつき、ここで笑つていた彼とは全く違う様子に不安な気持ちになる。

私、調子にのり過ぎたのかも。ずいぶん時間が経つたというのに、一向に帰ろうとする素振りも見せないことが重荷になったとか。こんなときに気の利いた言葉ひとつ思い浮かばない自分が情けなかった。

「——そろそろ、帰りましょうか」

名残惜しいけど仕方ないよね。私は自分の気持ちを抑えて、そう口にした。彼の視線がこちらに向けられる。何か言いたげなその瞳を、戸惑いながら見つめ返した。少しの沈黙のあと、彼が静かに言った。

「部屋を、取りました」

「え……」

「正直に言います」

真つ直ぐな眼差しに捉えられて、身動きが取れない。

「着物姿のあなたを見かけたときから、気になって仕方ありませんでした。高德院では偶然を装つて、あなたに近付いたんです。ぶつかりそうな振りをして」

大仏様の後ろ側に回り込んだときのことが頭に浮かぶ。……偶然では、なかった？

「一緒に過ごしてみても、僕の思った通りの人だということがわかりました。控え目で慎ましくて、笑顔が素敵で……離れ難くなりました」

彼はまだほとんど口を付けていない焼酎の入ったグラスを、両手でぎゅっと握った。私の心まで一緒に掴まれたようで苦しくなる。この激しい動悸は、お酒のせいだけじゃない。

「江の島に行ったのも、食事に誘ったのも、何とか時間をかけて一緒にいたかったからなんです」彼の言葉で私の中がいつぱいになり、いくら冷静に考えようとしても無駄だった。

「あなたと、このまま別れたくない」

切なげな声に、胸の奥が軋む。

「朝まで……僕と一緒にいてくれませんか」

夢心地だった世界から一転して、目の覚めるような思いだった。朝まで、ということは、私の勘違いでなければそういうことで……いいんだよね。

きつとこの先の人生で、こんなにも素敵な人に出逢うことなんてないだろう。それに……お見合いは三日後に迫っていて、私にはもう自由な時間がない。

「今日逢ったばかりなのに、こんなことを言う僕のこと……軽蔑しますか」

「そんな、軽蔑なんてしていません」

思わず、言っていた。でも本気なんだろうか。本気で……私と。

「——私も、同じことを思いましたから。あなたと……」

自分でも驚くような言葉だった。

こんな言葉を口にしてしまうほど、私も、彼と別れ難かった。今は、お見合いのことなんて忘れて、この人と一緒にいたい。

「それは僕の思いに応えてもらえる、と理解していいんでしょうか」

「……ええ」

もしかしたら、こういうことに免疫のない私は、彼の甘い言葉に引かかってしまっただけなのかもしれない。簡単に落ちた私は、心の中で笑われているのかもしれない。

でも、それならそれでよかった。

お見合いをして、好きでもない人と結婚するのなら、その前に一度でも夢を見てみたかった。恋に近いものに浸って肌を合わせてみたい。この人とならいいって……そう思ってしまったから。

「そうですか」

彼は一瞬悲しい表情をして口を引き結んだ。その翳りに困惑する。もしや軽い女だと思われたの？ でも自分から誘っておいて、そんなことを思うもの？

「ありがとう。もうしばらくしたら部屋に行きましょう。あなたの気が変わらないうちに」

後悔しても、二度と巡り会えないかもしれない。彼の言った言葉を無理やり今の自分に当て嵌めて、一緒にいることを正当化しようとしていた。

外泊することを母にメールし、お店の外で待っている彼のもとへと急いだ。

冷たい風が海のほうから吹き上げ、私の着物の袂をバタバタとはためかせた。足元から虫の音が

聞こえ、真つ暗な空には明るい月が輝いている。

「結構寒いですね。大丈夫ですか？」

「はい。あ……」

彼が私の肩を抱き寄せた。その力強さに……これからこの人に抱かれるんだと、頭ではなく体で思い知らされた。私、何も知らないのに、ちゃんどできるだろうか。

小さな秘密の共有ではなく、今度は本当の秘密を二人で作りにいく。ひそかな共犯者の横顔をそつと見上げ、胸に覚悟を決めた。

曇りガラスでできたカーブを描く横長の壁は、内側から漏れる灯りで全体がライトアップされたように見える。身を寄せ合いながらそこを通り過ぎ、入り口からロビーへ入った。

既に鍵を持っていた彼と、客室に向かつて進む。先ほどのガラスの壁の内側は客室前の廊下になっついていて、どこまでも温かいオレンジ色の灯りが幻想的だった。ドアの前で彼が立ち止まり、ルームキーを差し込んだ。

部屋は空調が効いていて、ふんわりとした暖かさに体が包まれる。ツインのベッドルームが目に飛び込んだ。その現実を目の当たりにして恥ずかしくなった私は急ぎ足で窓際へ行き、椅子の上に荷物を置いた。

「外、見えますか？」

部屋の中で初めて、彼が言葉を発した。カーテンを少し開けて外を見る。

「国道を走る車が見えます。江の島の灯台も」

すぐ後ろに立った彼は私の両肩に手をのせ、うなじに顔を埋めた。

「！」

敏感に体が反応してしまい、大きく身をよじらせる。私のうなじに何度も唇を押し当てている様子が目の前のガラスに映っていて、かっと顔が熱くなった。知識だけはあるけど、このまま任せていいものなのかどうなのか……首筋に当たる感触に気がいってしまっって何も考えられない。

後ろから私を抱きしめた彼は、自分のほうへと向き直らせた。顔を近づけられ、咄嗟に顔を強く閉じる。いきなりこんな……どうしよう。

肩を縮ませていると唇が重なった。彼の腕の中で身を固くする。ついにむようなキスに慣れてきた頃、彼の舌がゆつくりと私の口の中に入ってきた。驚いて肩がびくりと揺れてしまう。私も同じようにしたほうがいいんだよ、ね？ でもタイミングが上手く掴めない。されるがままになっていると、一旦唇を離れた彼が掠れた声で甘く囁いた。

「あなたの舌も、僕にください」

再び含まされた柔らかな舌に、恐る恐る私の舌を差し出して応えた。彼は私の舌をすくい取り、何度も強く吸い上げた。柔らかくて温かくて絡ませた先から溶けてしまいそう。初めてなのに不思議なほど嫌じゃない。嫌だと思っどころか、もっと……して欲しいくらい……

「ん……」

頭がぼうつとして体が熱い。次第に深まる口付けに声が漏れそうになるのを堪えたせいで、息遣いが荒くなる。そこに反応した彼が私の体を優しく撫で始めた。それだけなのにたまらなく気持ち

よくて、足元から崩れてしまいそう。

「あの」

唇を離し、私と同じように小刻みに息をしていた彼が申し訳なさそうに言った。

「すみません……どこから脱がせたらいいか、わからないんです。女性の着物に触れるのは初めてで」

「あ、えつと……この紐を」

震える手で帯締めをほどくと、彼がそれをゆつくりと引つ張つて取り上げた。

「次は？」

「つぎ、は……、あつ」

耳に唇を押し付けられて、帯に置いた手が止まってしまふ。彼は私の耳を舐めながら自分の羽織はおりを脱いだ。衣擦きあずれの音に重なる熱い息遣いと彼の唇の心地良さに、足の間がどんどん濡れてしまつているのがわかる。

「素敵な着物なので、これ以上はやめておきます」

手を止めた彼が私をそつと抱きしめた。

「慣れない僕が下手に脱がせて、あなたのお気に入りの着物が皺しわになったら大変ですよね。すみません、せつかく教えてくださるうとしたのに」

「いえ、そんなこと」

微笑んだ彼は私に軽くキスをしてから、自分の帯に手を置いてほどき始めた。

「僕が先にシャワーを浴びますから、その間に……脱いでいて下さいっていうのもなんですけど、着物を畳んで待つていて下さいますか」

「はい」

着物を脱ぐ彼を見てはいけない気がして、慌てて背を向けた。

「浴衣ゆかたがありましたから、あなたの分はベッドの上に置いておきますね」

「あ、ありがとうございます」

がちやりと音がして振り向くと、彼は帯をベッドの上に残して、バスルームへ入つたようだった。ひと息吐いて帯揚げに手を回す。まだ、手が震えている。帯をほどいて着物を脱いだ。ベッドの上に帯と着物を広げて丁寧に畳む。足袋たびも襦袢じゆばんも脱ぎ、ホテルの浴衣せいでに袖を通してから、裾に手を割り入れてショーツの中を確認した。

「……やだ、どうしよう」

さつきから感じてたけど……キスだけでこんなに濡れちゃうものなんだ。恥ずかしいから早く洗つてしまいたい。浴衣帯を締めて、紙袋から取り出した風呂敷をデスクの上に広げた。畳んだ着物や帯や襦袢、髪から抜いた簪かんざしを重ねてのせる。

シャワーの音が消えた。

心臓が、どくと跳ねる。このあと、またあんなに熱いキスをされるのかな。というか、キスどころの話じゃないわけで……

「あれ……?」

そういうえば帯締めがない。彼、どこへ置いたんだろう。辺りを見回してみる。窓際へ歩み寄ると、椅子の上にあった。でも蝶の形の帯留めは紐から抜けてしまったのか、どこにも見当たらない。とりあえず帯締めだけを着物の上にのせたとき、バスルームのドアが開いた。

「お先にすみません。どうぞ」

彼は私と同様、ホテルの浴衣を着ていた。前が少しはだけて鎖骨が見えている。何とも言えない艶つぼさから目を逸らしてしまった。いちいちドキドキしてたら、このあと、身がもたないってば。「畳めました？」

「え、ええ。おかげさまで」

仕方がない。この部屋に落としたのは間違いないんだから、帯留めはあとで探そう。

素早くシャワーを浴びた。おかしなところがないかどうか、タオルで拭きながら鏡に映る自分の体を見つめる。何度も深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。私、とうとう本当にこれから……しちゃうんだ。もう決めたんだから迷わない。外して洗面台に置いていたネックレスを、再び着ける。部屋の灯りは薄暗いものに調節されていた。タオル地のスリッパを履き、ベッドに座る彼のそばに立つ。

「お待ちせしました」

「いえ。シャワー熱くなかったですか？」

「ちょうどよかったです。温まりました」

「そうですか……確かめさせてください」

手を伸ばした彼は私を隣へ座らせ、洗ったばかりの首筋を指先でゆっくり撫でた。

「僕の名前は」

肩に回された彼の右手に強い力が込められる。

「そうすけ、と言います」

そう、すけ。どういう漢字で「そうすけ」と書くんだろう。

「わかりませんか」

「え……？」

わからないってどういうこと？ 意味が理解できず、答えに困っていると彼が続けた。

「あなたの名前は？」

「七緒、です」

彼の真似をして下の名前だけ。どんな字なのかも伝えなくていいよね。

「ななお、さん」

「はい」

返事をした唇にキスをされた。唇を重ねたままそっと押し倒され、ベッドに仰向けになる。心臓が彼に聞こえてしまいそうなくらいの大きな音で鳴り響いていた。体が緊張で強張っている。唇を離した彼が囁いた。

「ななおさん……好きです」

「え……？」



意外な言葉に耳を疑った。好き、って、今日逢ったばかりの私を……？

「あなたは？ 僕のこと、少しでも好きになってももらえたでしょうか」

応えても、いいのだろうか。

「……ええ、好き……です」

躊躇うことなど許されない眼差しを受け、自然と唇が動いていた。その言葉に嘘はない。好きじゃなければ、ここまでついて来ない。ひと目でこんなにも心を動かされた人に出逢ったのは、初めてだった。

彼は眉根を寄せて大きく息を吸い込んだ。

「明日の朝、僕のことを教えます。何もかも全部。だからあなたのことも教えてください。僕に全て」

教えるというのは、名字や歳やお互いのプライベートのこと？ 彼の瞳を見つめ返して、私は頷いた。

「わかりました」

「ありがとうございます。朝までは……僕のことだけ考えていて下さい」

不覚にもその言葉に胸がきゅんとした。私の上に乗る彼がネックレスに触れる。

「これ、さっきの店で名前が付いていたのを見ましたか？」

「いえ」

「古都に咲く花、と書いてありました」

「古都に咲く花……」

「僕にとつて、あなたがそうです。ななおさん」

「んっ！」

瞬きする間もないほどだった。強く唇を塞がれて息ができない。さつきとは全然違う、何もかも奪い尽くされてしまいそうな激しいキスに、悲しくもないのに涙が滲んだ。

「……本当にいいんですね」

息を乱しながら顔を離れた彼は、私を着ている浴衣の襟元に手をかけた。間近にある熱の浮かんだ瞳に、私が映っている。

「あなたが嫌がることはしたくない。きちんと避妊もします。でも、途中でやめられる自信だけはありません」

私を好きだと言ってくれた、その思いに縋ってみたい。それだけで今は、いい。この人になら……ううん、この人がいい。

「……して、ください」

「ななおさん……！」

襟を引いて首筋に顔を埋めたそうすけさんは、剥き出しになった私の肩から鎖骨辺りに、唇を押し付け、吸い付いた。

「あ……」

ため息を漏らすと、彼が手を止め顔を上げた。